種文学賞　令和五年第一回目　作品集　下巻

令和五年第一回目の種文学賞は、

・小学三年生の部「〇〇前のわたし〈」

・小学四年〜五年生の部「地の文をつくろう　Level.1」

・小学六年〜中学一年生の部「地の文をつくろう　Level.2」

・中学二年〜三年生の部「地の文をつくろう　Level.3」

というお題で作品をつのり、最終的に全十五人による力作がそろいました。

この下巻では、中学二年生〜三年生の部の作品と、受賞者の発表および講評を書いています。ぜひ最後までお楽しみください。

目次

中学二〜三年生の部　……　四ページ

最優秀作品受賞者発表　……　十三ページ

◆◇　中学二～三年生の部　◇◆

中学二～三年生の部の作品を発表します。この部のお題は「地の文をつくろう Level.3」。取り組む会話文は小学六年～中学一年生の部と同じものですが、地の文の創作をしたあとに、自分が工夫した点やこだわったところを四百字程度で述べる作文課題が加わっています。

その作者コメントもあわせて、それぞれの作品をお楽しみください。

〈今回の会話文〉

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

「・・・」

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

「もどりたくない。」

「どうして？」

「・・・」

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

＊＊＊＊＊

作者 S（中二）

〈これまでのあらすじ〉

一週間後にせまるクラス対抗作品コンテストにむけて作品が仕上げに入っていた。ところが今朝、その作品が破損しているのが見つかった。その日の朝礼に悠太がいないことに気づき、親友である健斗が探しに行った。

さっきまで一緒に登校していたのに。自分が何か悠太を傷つけてしまっただろうか。健斗は学校全体をくまなく探した。悠太とよく話した屋上、部活帰りに、先生に隠れてスマホをさわったあの校庭裏、一緒に汗を流したグラウンドなど悠太が居そうなところをたくさん探した。健斗が茫然自失として、グラウンドの前にあるベンチに腰を下ろした。すると、遠くの自販機の横に下を向いて顔もはっきりとはわからない一人が座りこんでいるのが見えた。健斗はとっさに悠太かもしれないと思い、全力で走り出した。すぐにわかった。これは悠太なんだと。でも健斗には衝撃が走った。今までに見たことがない悠太であったからだ。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

とりあえず皆のところに戻ろうと考えた。

「・・・」

返事がない。悠太はぐっと拳を握っていた。泣いた後なのか目が赤くはれていた。健斗の不安はさらに増す一方だった。でも探し始めてから結構時間が経つ。みんなも心配しているであろう。複雑な気持ちだが早く戻ることを優先した。

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

悠太は下を向いたままである。さらに顔も固くなった気もする。喋っても反応のない悠太には怒りも覚えた。

しかし、このとき悠太はひどい自責の念にかられていたのだった。

昨日、野球部の練習が終わり、教室に戻った。悠太は自分のもっていたやわらかい野球ボールを教室で何度も床にバウンドさせ遊んでいた。3回程ボールが跳ねあがったときだった。悠太は強い力でボールを床に叩きつけた。床から押し返されてきたボールは悠太の指の間をさらっと抜けていった。そして勢いに乗ったボールは運悪く、片隅にあるみんなで作った作品にぶつかった。悠太は顔が青ざめた。作品はばらばらになった。取り返しのつかないことをしてしまった。今までどれほど苦労して作ってきた作品か間近で見てきたから、皆の悲しみは痛いほど想像できた。自分が謝っても冷たい視線をあびるのが怖かった。素直に謝りたいという気持ちがある反面、後のことを考えた時の恐怖があった。

「もどりたくない。」

悠太は謝れなかった。健斗の苛立ちはさらに増し、少し強い口調になっていた。

「どうして?」

悠太をしっかりみた。下を向いている悠太の瞳から大粒の涙が地面に落ちるのが見えた。

「・・・」

沈黙が続いた。健斗は悠太が自分に何か悟ってもらいたいのではないかとも思えた。悠太に最後のダメ押しをした。さっきよりも優しい口調で。

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

また少しの沈黙のあと、悠太が赤くはれあがった目で健斗を力強

く見た。

〈作者コメント〉

悠太が朝礼からいなくなった理由を色々な方面で考える健斗と、自分のあやまちを誰にも打ちあけることができない悠太の二人の複雑な気持ちがストーリーとともに展開してゆき内面的に成長していくような物語だと思います。場面場面の二人の心情の変化に注目して読んでもらいたいです。例えば、初めに健斗が悠太を探すときに何を感じていたのか…また、健斗の口調の変化には心情にどのような背景があったのか…などです。そして、地の文を細かく挟んだことによって一つ一つの場面が想像されやすくなっていることも注目してほしいところです。「顔もはっきりとはわからない一人が座りこんで」の所などは「一人」と書くことでより孤立が際立ち、どこか悠太のさびしさなども感じられます。「健斗を力強く見た」という文章の終わり方によって、悠太がなにか大きな決心をし、今まで黙っていたことを健斗に打ち明けようとしているのではないかという今後の展開も想像することができます。

＊＊＊＊＊

作者　特隊（中三）

〈これまでのあらすじ〉

その日は雨が降っていた。青年は学校の帰りに神社により、拝殿の階段に座りこんだ。青年がふと目を閉じると、真っ赤な光る球体と薄墨色のもやが話し合っていた。青年は驚きつつ、その会話を聞いた。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

目を閉じているのにくっきり見えるその摩訶不思議な状況に青年は驚愕せざるを得なかった。だがその程度では年ごろの青年の好奇心を奪うことはできなかった。なぜか青年はなんとも言えない気持ちだった。

「・・・」

真っ赤に光るなにかは薄墨色のもやに話しかけた。返事はなかった。心拍数が少し上がった青年は違和感を覚えた。

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

真っ赤に光る何かは間髪入れずに説得を始めた。青年の心拍数はさらに上がった。

「もどりたくない。」

今度は薄墨色のもやが口を開いた。だがその声は小さく震えていた。

その瞬間青年の胸に何かがよぎった。それは青年が少年の時に花瓶を割ってしまった時に感じたモノ、不安だと青年はすぐに気づいた。

「どうして?」

真っ赤に光る何かは相変らずどこか一途な所があるようだ。青年はなにかが煮えたぎるような気持ちになっていた。

「・・・」

薄墨色のもやはまただまってしまった。もはや何も喋らない。

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

真っ赤に光る何かは、いらだった声で喋る。青年はそいつが怒りにまかせて何かを忘れたがっているように見えた。

青年は学生鞄から縄で結ばれた一升瓶を取り出し、そのくびを割って開けると一口飲んだ。そして青年はできるかぎり力を込めて遠くへ放り投げた。日にちは昭和二十年八月十三日、青年は帽子を

かぶると立ち上がり、前へと歩き出した。

〈作者コメント〉

今回の地の文創作に当たって工夫した点は、作品のストーリーへの理解の深まり方です。作中のテーマは戦争とそこに配属された青年とその心情の話になります。初めの方ではなんのことを書いているかが分かりませんが、作品が終わりへと近づくにつれてその正体が明らかになっていきます。そのため一度目はもちろん二度目に読んだ時がおもしろい作品になっているはずです。

次に、青年の感情として出てくる二つの何かについてです。二つの何かの正体は、怒りと不安です。真っ赤に光る何かは怒りで、作中でははっきりと怒りだという説明はしないでおき、何個か怒りを思わせるような工夫を施しています。話の中には、「どこか一途な所があるようだ」とありますが、その一途さが文面から表れるように「真っ赤に光る何か」という表現を一番最初をのぞき全てセリフのすぐ後にくるようにしています。

＊＊＊＊＊

作者　無限架空会社の社長（中三）

〈これまでのあらすじ〉

悠生の家のパーティーに招待された大地は、自分が嫌っている人がいることを知る。彼らに悠生をとられ、大地は一人になりいつのまにか家を飛びだした。悠生が探しに行き、近くの公園の遊具の下で大地を見つけた。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

悠生は大地にやさしく声をかけたが、

「・・・」

大地はうつむいたままで何も話さない。悠生は家に残っている仲間のことを考え、

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

と、大地の肩をやさしく叩きながら言った。大地は悠生の方をちらりと見たが、またうつむいて

「もどりたくない。」

とだけ弱々しく言った。悠生は

「どうして?」

と大地の顔を下からのぞきこむように言った。だがその行動を嫌と思ったのか、

「・・・」

大地はしゃがんでさらにうつむいてしまった。このままではらちがあかないので、悠生は、

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

と急かすように言うと、大地はようやく立ちあがり、悠生のほうを向いた。

〈作者コメント〉

僕がこの地の文を創作するにあたり、こだわったところは、実体験をもとに物語を考え、二人の登場人物の心情がわかりやすく言い表せるようにしたところである。自分の実体験をすべて説明文のように書くのではなく、二人の関係性や内面などを言葉にして伝えている。

もう一つ、この文を創作するにあたって工夫したところは、二人の人物の動きをとらえているところである。何も動いていない状態であれば二人がただただ離れているだけのおもしろくない会話文になってしまうが、二人の表情に加えて、文中にある「大地の顔を下からのぞきこむように」や、「大地は悠生の方をちらりと見た」のように、二人の一つ一つの細かい動きや言葉を発する時にでる自然な動作もおり混ぜることによって、二人がどのような気持ちで会話をしていたのかがはっきりとわかる文となるように工夫した。

＊＊＊＊＊

作者　餅米（中三）

〈これまでのあらすじ〉

遠足先の巨大な公園で木下君小学二年は迷子になってしまった。集合時間になっても戻ってこない彼を、担任の北口先生ら四人の先生が探しに行く。数分後、北口先生が大きなほら穴の中に座っている木下君を発見した。

曇り空の下、ザッザッと大きなほら穴の中に一人の足音が響く。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう。」

北口先生は少しおどろきつつもジメジメしたほら穴の中で座っている木下君に手を差しのべた。

「…」

木下君は上を向いてボーッとしている。

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる。」

「もどりたくない。」

やっとしゃべった言葉がこれだ。おまけに動こうともしない。

「どうして？」

北口先生はしゃがみ込んで目線を合わそうとした。

「…」

だが、木下君は目線を合わそうとすらしない。しゃべることが大好きないつもの彼とは別人のように思えた。北口先生は流石にあきれてしまった。

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く。」

木下君の右腕をつかみ無理矢理にでも立たせようとした。

その瞬間、北口先生は思い出した。自分も昔、この場所でナニカに心を奪われたかのように何時間もボーッとしていたことを。

〈作者コメント〉

私がこの地の文を創作するにあたって工夫した点は三つあります。

一つ目は、「曇り空」「一人の足音が響く」「ジメジメ」などの言葉を使って、初めの方で不気味な雰囲気や何か嫌な予感がするな、と読む人に感づいてもらえるようにしました。また、話が進むにつれて不気味さを増しています。

二つ目は、「しゃべることが大好きな」といつもの木下君の性格を綴り、それを今の彼と比べて何かがおかしいことを表しました。

三つ目は、最後の二文で衝撃とゾクゾク、続きを求める興味を一気に与えることにこだわりました。他にも、倒置法を用いることによ

ってこの文の印象(いんしょう)を強くしました。

「この続きが読みたい！」と思える地の文を作ることができたと私は思います。

◆◇　受賞者発表　◇◆

今回の種文学賞は、審査員として「こくごネット」の中島広大先生に加わっていただきました。審査は次の通りの方法で行いました。

①中島先生と山分がそれぞれ各部の中でいちばん良いと考える作品一点ずつを挙げる。

②さらにその中から優れている三点を優秀作品として選ぶ。ここに選ばれなかった一点は佳作とする。

③中島・山分ともに優秀作品に選ばれたものを大賞とする。

このような手順で選出した佳作、優秀作品、大賞は以下の通りです！

※当初お伝えしていた選考方法から変更いたしました。

【佳作】

空（小学三年生の部）　…山分選

ランボルギーニ（小学四～五年生の部）　…中島選

【優秀作品】

おっくーたぬき（小学三年生の部）　…中島選

海（小学～五年生の部）　…山分選

【大賞】

マツタケ（小学六年～中学一年生の部）

特隊（中学二～三年生の部）

◆◇ 講評 ◇◆

【山分より】

小学三年生の部では、思っていることをすなおに自分らしく書けているかということを大事なところとして選びました。空さんのよかったところは、高学年の人にぶつかったことをちゃんとあやまったけれど、やっぱり心配でつぎの日に外に出たくなくなってしまったというところです。その気もちをすなおに書いてくれていたのが、この文章をかがやかせていると感じました。

そして、それ以上の部では、「地の文をつくろう」というお題に取り組んでもらうにあたって大事にしている、〈地の文の役割をしっかり果たしている表現をつくれているか〉ということが評価のポイントでした。この点で一番優れていたのはマツタケさんの作品です。日かげと日なたをつかって主人公の思いをつたえていたのは見事だったというほかありません。もう一方の大賞の特隊さんは世界観の深さで群を抜いていました。あの会話文からこんな場面が想像されるなんて、私も想定していませんでした。

小学四〜五年生の部では海さんの作品を優秀作品に選びました。決め手になったのは、主人公のたさが最後、手足を洗ったあとにせっけんがついたまま出てきたとしたところです。一見なんでもない地味なことに見えますが、これは地の文の役割をしっかり果たした文学的な表現だと思います。たさのはやる気もちを、さりげないかたちで見事に表現できています。

選ばせてもらった作品以外にも、おしい作品がたくさんありました。選ばなければならないということが非常に苦しかったです。みなさん、本当によくがんばりました！

【中島広大先生より】

おっくーたぬきさん　あなたの心にきざまれた「こうかい」がゆたかな言葉でえがかれ、はっきりとつたわりました。わたしの心はしげきされ、わたしの心にある「こうかい」をもういちどみつめる楽しい時をすごせました。心にきざまれたその気持ちを大切に、また新たな気持ちを心でつかまれる事を願（ねが）っています。

特隊さん　あなたの作品は心の性質の一面を考える機会を与えてくださいました。心の内に生じている揺らぎ、葛藤、共存が発想力を通して生み出された構成、展開にて巧みに描かれています。最後の「立ち上がり、前へと歩き出した」という一文が、作品に複雑な心と向き合い続ける覚悟とその先にある希望という色合いを加えており好きです。引き続き、発想力を活かし、より良いものを生み出そうとする情熱を絶やすことなく歩まれることを願っております。

マツタケさん　あなたの作品から地の文の価値、可能性を改めて認識することができました。「木の影」という一定の軸に「時間の移り変わり」という変化が巧みに絡み合い会話文では描ききれない心の情景を感じ取ることができました。言葉が生み出す素晴らしい体験をありがとうございました。引き続き、言葉が持つ力を用い新たな体験を生み出されることを期待しています。